

山と博物館

第42巻 第5号 1997年5月25日

大町山岳博物館

標高三千メートルの世界を描く

金栄 健介



花 献

特別展

標高3000mの世界を描く

「金栄健介 — 山岳絵画展 —」 5/24(土)~6/15(日)

併設：白山の高山植物絵

山岳博物館教室にて開催 (本展・併設展のみ無料)

山の絵を描きたいという思いが、ふとした切っ掛けから湧きおこった。昭和三十四年、金沢美術工芸大学日本画専攻を卒業し、テーマルウェアのチーフデザイナーとして四十七年間、いま六十才になった。その間、画家の道に思いをはせながら、何を描きたいのか、その対象、発想が掴めないまま時が過ぎていった。

それでも四十才代では8ミリ映画制作に夢中になり、五十才になった昭和六十三年、友人の薦めから白山に初めて登った。そして、その素晴らしさに魅了され、平成四年中部地方の山々を撮り始めた。山の写真展を金沢で発表した。

その会場で、あるアマチュアのカメラマンがいろいろ教えてくれたものの、論理中心の技術論に内心かえって反発した。そんな理論はどうでもいい、山に登った時の素晴らしさ、驚き、恐怖など、自然の神秘的な現象や自分の感じた精神的な内面まで素直に表現できないのか……。そう感じた時、無性に山の絵を描きたくなった。

山を遠くから眺めた絵の美しさより、私はその山を苦勞して登り、山の厳しさや激しさ、神秘的な優しさを知り、自分を等高の視点においてこそ初めて、その内面的な山の素晴らしさを、感じとれると思っている。

星空に浮かび上がった赤岳が自分に覆い被さるがごとく感じた恐怖感や圧迫感。白馬や爺ヶ岳での自分が仏に写ったプロッケンの幻想。遠見尾根や仙丈のブリザードの厳しさ。剣岳の氷ついたタテバエの恐怖心に何かにすがりたい状態。槍ヶ岳で眼前での落雷の危機。絵の表現はアクリル絵の具で対象を遠近法よりも、平面的に置き換え、感動したものを強く前面に押し出したため、平面的に置き換え、自然現象から、目に見えない魂や精神世界まで、描きたいと思っている。

こうして、山にひかれて行く自分がなぜか、不思議に思えるのである。

(山岳画家)

ビジターセンターにおける インタープリテーション

小林 毅

アメリカやオーストラリア、ニュージーランドなどの国立公園を訪ねると、拠点となる場所にビジターセンターがあり、スタイルのビシツとよまいったレンジャーがいて周辺地域の情報を提供したり、自然とふれあう様々なプログラムを提供している。レンジャーは子どもたちのあこがれの職業になっているとも聞く。

アメリカでは一九一七年頃から、「来訪者たちが国立公園の目的を理解し、責任ある態度でその場所を利用するようになる」ことを目的に、国立公園の中でインタープリテーション活動を行うようになった。日本でも一九三一年に国立公園制度が導入され、一九六〇年頃からビジターセンターや展示などが整備された。この頃に、インタープリテーションという考え方も紹介されているのだが、実際に仕事として成立するようになったのは一九八一年、たった一六年前のことなのである。

ビジターセンター？ インタープリター？

ここで、「ビジターセンター」「インタープリター」という聞きなれない用語について説明しておこう。

ビジターセンター (Visitor Center, Visitors' Center) は、自然公園などへの来訪者 (ビジター) に対し、周辺地域の地理・施設・利用などに関する情報が提供される、便利な施設だと理解しておこう。公園内の自然等が紹介されるような展示もあることから、

「博物館施設」と呼ばれていた。博物館展示施設という呼び方では博物館のよな印象をもたれるが、実際にはビジターセンターは既述のように博物館とは異なる役割を有しているし、適当な日本語があてはまらず、現在ではそのままビジターセンターと呼ばれている。

直訳すればビジターセンターは「来訪者のための拠点施設」となるのだが、今だにジビターセンター (耳鼻科?)、ビジネスセンター (宿泊可?) などと呼び間違えられ、ひどい時にはベジタブルセンター (青果?) などと呼ばれて、笑うに笑えない事態に陥ることもある。

次にインタープリターだが、直訳すれば「通訳者」、日本語と外国語の通訳者もインタープリターと呼ばれる。自然の分野のインタープリターも、自然のことは「メッセージの通訳者」と考えれば理解しやすいだろう。

(雑誌などで間違ってインタープリンターと書かれることがある。コンピュータームの書か、まだプリンターの知名度に負けているということか?)。気をとりなおして:)

インタープリターが行う業務は「自然の情報」を基に、伝え手の感性を媒介として、聞き手が新しい次元を聞くように導くこと (新しい世界・認識に気づくようにすること) である。別の言い方をすれば、インタープリテーションは、「あらゆる事実の背後に存在する、より大きな真実を解き明かすもの」で

あり「誰もが持っているちよつとした好奇心を最大限に利用して、来訪者の知的・精神的な向上を促すもの」といえる。日本語では「解説」と訳される。新聞社やテレビ局の解説者の役割などにも似ていると思われる。

つまり、植物や鳥などの種名や名前の由来や事象などを教えるという、単なる情報 (知識) の伝達ではなく、参加者が自ら感じたり自分と自然とのつながりを見いだしたり、各自の内なるものと自然とがつながるように促すことが大切となる。自然の中の不思議やおもしろいものを見つけ出す自らの感性 (センス・オブ・ワンダー) に気づいてもらうことや、知識ではなく自然の見方 (方法) を体験してもらおうような視点が重要である。

インタープリテーションの手法としては、一方的に事象を「説明」するのではなく、参加者に体験してもらおうように促し、参加者自らが何かを感じてもらおうこと、そしてそれらを参加者同士でわかちあう方法がとられる。

ちなみに、ここでは自然の分野についてとりあげたが (この場合はネイチャー・インタープリテーションと呼んでもよい)、インタプリテーションの素材としては、文化でも民俗的なことでも歴史でも社会的なことでも対象となりうるのである。

山のふもとと村ビジターセンターにおけるインタープリテーション

それでは、具体的なインタープリテーションの事例をお伝えしよう。ここでは、東京都の奥多摩町 (奥多摩湖畔) にある山のふもとと村の例をとって紹介する。

インタープリテーションには、解説員 (インタープリター) が直接来訪者 (ビジター) に対応するものと、直接は対応しないが何らかの方法を用いて間接的に解説する方法とがある。

〈直接解説 = Personal Interpretation〉
解説員が直接来訪者に対応するので、参加者のようす (レベル) や反応にあわせて解説できる。反面、一度に多くの人には対応できない。自然教育では非常に大切な、「やる気になる」こと、実践したことの「ふりかえり」、みんなとの「わかちあい」などを促すことができる。

ガイドウォーク

インタープリターと一緒に歩きながら野外の自然を解説するプログラム。その時期に体験できる自然 (トピックス) を素材として、さまざまな気づきをもってもらおうことがねらいである。



ガイドウォークのようす

レンジャートーク

室内での展示の解説や、トピックスが体験できる場所での定点解説、歩き回りながらの解説 (ロビング) などをさしている。プログラムをよびかけても参加してこない人たちが



ナイトプログラムのようす

〈間接解説＝Non Personal Interpretation〉
この方法は多くの来訪者に対応できるという

公募型自然教室
東京都の広報などで参加者を募集して行う催しである。山のふるさと村には宿泊施設があることから、宿泊してゆったり自然に親しむプログラムを用意している。夏には子どもだけの自然教室も行っている。公募型の行事には、関心の強い人たちが参加してくる。右に示した様々なプログラムがふらっと訪れてきた来訪者（自然への関心・意識が比較的薄い人たち）を対象としているのと比べると参加者層が異なっている。



レングャートークのようす

インフォメーション
周辺地域や施設の案内などをインフォメーションカウンターで行っている。自然などについてのやりとりはそれ程多くはないが、案内の仕方をインタープリティブにする方法は考えられる。例えば単なる案内情報の提供に終わらず、その情報に関連して自然情報を伝えたり、見方を解説するなどである。

スライドトーク
マルチスライドを利用して、自然や自然の体験の仕方などを紹介するプログラム。スライドは二台一面マルチで、解説員自らプログラムを組めるシステムである。スライドの前には五分程度のトビックス・トークも行う。

宿泊者向けプログラム

夜や夕方、早朝などに、宿泊者を対象に夜行性の動物を観察したりする「ナイトプログラム」や早朝のすがすがしい時間帯に五感で自然を体験する「おはようウォーク」などがある。



ちびっこあーとのようす



子供をひきつけるためにさまざまな工夫をする

展示

展示は、室内展示と野外展示に分けられる。室内の展示は、単なる情報や知識の伝達に終わらないよう、参加したり体験したりできるような内容を多くしている。このような展示をハンズ・オン展示といい、解説員が来訪者の反応を見ながら手作りする。野外展示は山のふるさと村にはあまりないが、一般には解説板などがあてはまる。

印刷物

解説員のガイドなしに来訪者だけで自然を

体験しながらネイチャートレイルを歩けるようなシステムとしてセルフガイドがある。また、どのように自然の体験をしたらよいのかといった過程をたどれるようなワークシート、トレイルごとのガイドマップなどを用意している。小さな子どもには、子ども向けにプログラムデザインされた印刷物が必要になるが、山のふるさと村では「ぬり絵」が好評である。山のふるさと村の生き物をデザインした手作りのぬり絵だが、「夜の動物たち」には特別人気がある。

この他に、総合的なプログラムとして、「レングャートークプログラム」「友の会プログラム」などを行っている。家族が多数訪れて来るので、子ども向けのプログラムをたくさん用意しているが、特に繰り返し訪れて来る子どもたちには、活動に参加するとワッペンや認定証がもらえ、段々ステップアップしていけるようになっていく。



Jr.レンジャープログラム認定証授与式

また友の会は、自然への活動が単発にならないよう、繰り返し参加できるようにシステムとし、気づき知識自然とつきあう技術自ら行動する、といった段階目標をもったプログラムを提供するものである。まだ未完成的であるが、少しずつ展開を進めている。

インタープリテーションで大切なこと

インタープリテーションの定義の所でその方法について簡単に述べたが、それ以外にも次のような視点が大切である。

一つは、解説の方針をしっかりと定めておくことである。日本の自然公園ではマネージメントプランが曖昧である。比重的にも許認可関係の管理計画の方が大きく、運営計画のほうは貧弱だ。自然公園の管理方針をしっかりと打ち出せば、インタープリターとしてはそれらを来訪者に効果的に伝えるためにどのようなプログラムを提供したらよいかを考え、デザ

インする本来の仕事に集中できる。

また、施設や展示、解説プログラムが利用者不在で計画される、という現状にも苦言を投じなければならぬ。来訪者の興味や関心に合わせて解説を行うことはインタープリテーションの原則であり、作り手の満足感を満たすだけのものにならないような配慮が必要である。用意したものが利用者にとって本当に必要なものかどうか、利用者が理解し有効に感じるかどうかなどについて調査することが必要である、このような分野は「ビクターズ・スタディー」と呼ばれている。

今後の課題

アメリカの国立公園で伺った話だが、国家予算が厳しくなると、まず最初に公園の予算がカットされ、インタープリテーションの予算が一番に響くそうである。日本では、解説業務に行政の専門官がつけられないために業務を民間に委託する方式がとられている。アメリカと同様なのは、この委託費が十分でないということである。具体的な例を示して、このような活動を展開するのにこれだけの費用が必要だといっても、「そんなに活動をしなくてよるしい」と言われてしまう。そうならばいいそのこと、一人分の解説員の人件費を委託費でまかなってもらって、それ以外の活動の充実には、来訪者から参加費をとって実施したらどうかという提案もしているところである。行政の施設だから無料、という考え方はもう古いのではないだろうか。来訪者の人たちも応分の負担には抵抗がなくなってきたらいい。解説員側にも費用に合った、内容のある活動を展開しようと、より一生懸命になるのではないだろうか？

今後ビクターセンターにも、市民参加による活動の場やパートナーシップによる活動の展開が求められるだろう。解説員も自分の分担の範囲の素材の解説だけではなく、大きく言えば地球環境全体にまで及ぶ思考が必要に

なってくる。

以上、山のふもとと村の活動を中心にインタープリテーションについて紹介した。解説活動の質を向上させるには来訪者による要求も見逃せない。つまり、自然公園などに訪れた人たちが、そのビクターセンターに様々な活動の要求をすればよいのである。要求されても活動ができない施設は、スタッフを変えたりとか予算を増やすなどして対応を図らなければならぬようになるだろう。また、このようなインタープリテーション活動ができる可能性のある施設はビクターセンターにとどまらず、郷土資料館や学童保育の施設などたくさん思い当たる。こういった施設がそれぞれに適切なインタープリテーションの方法を駆使して活動を展開していたら、もう少し自然にやさしい人たちが増えていってもよさそうなものだと思うがいかがなものでしょうか？

(補足)

ビクターセンターなど自然教育関連施設の間には、お互いに連絡がとれて、情報交換をしながらレベルアップしていけるシステムも必要でしょう。私たちはこのようなネットワークキングのために「ネイチャーセンター研究会」という集まりの場も設けています。ご関心がおありの方は、ぜひご連絡下さい、資料・案内をお送りします。

(自然教育研究センター)

博物館だより

春の写生大会(五月一日)

山岳博物館付属園にて保育園・幼稚園児、小・中学生を対象に春の写生大会を開催しました。

当日は天候に恵まれ、参加者九十二名が思い思いの動物や植物を描いていました。参加

作品の中から三十二点が第四十二回中部地方動物園水族館写生コンクールに出品されます。

小鳥の声を聞く会(五月一日)

鳥羽悦男先生(梓川中学校)と長沢修介先生



小鳥の声を聞く会

生(山岳博物館嘱託員)を講師に迎え、恒例となりました小鳥の声を聞く会(山岳博物館友の会共催)をおこないました。

前日は長野県山岳総合センターをお借りして、鳥羽先生によるぬり絵や標本、スライドを用いた事前学習がおこなわれ、翌朝、小鳥の声を聞きながら鷹狩山頂を目指しました。今年サンコウチョウ、オオルリ、イカル、サンショウウオイなどを含めた三五種の鳥たちの鳴りや飛翔などを確認し、山頂では豚汁に舌鼓をうちました。

山と博物館第42巻第5号

一九九七年五月二十五日発行
発行 千歳長野県大町市大字大町八〇五六一
大町山岳博物館
TEL 〇二六-一三三-〇二二
印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 〇五四〇一七三三三三